

KAWAI CULTURAL MUSEUM

資料館 だより

13

川井村北上山地民俗資料館

2007.3.23 発行

NO.

岩手県下閉伊郡川井村大字川井2-187-1

川井村教育委員会事務局 0193-76-2167

資料館見学に来て!!

民俗資料館に展示してある昔の道具には、教科書に出てくるものがたくさんあります。歴史はもちろんのこと、「糸車」や「藁づつ」など国語の物語に登場する道具もありますし、算数や理科に関係ある道具（「枘」や「天秤」などの計量用具、「てこの原理」を応用した道具など）もいろいろな種類があります。当館ではこれらの資料を学習活動に活かせるよう、できるだけ対応したいと考えています。学校の授業の一環で見学する場合は事前にお問い合わせ下さい。

他にも宮古市立磯鶏小学校、墓目小学校、和井内小学校、刈屋小学校、茂市小学校、大槌町立金沢小学校、県立山田高校の皆さんが見学に訪れました。

川井小学校の3、4年生の皆さんは、「サイカチ」の実を水に浸してその手触りなどを体験し、昔は石鹸のように体や食器などを洗っていたことを知りました。



小国小学校5、6年生の皆さんは、歴史の授業で資料館から貸し出した「火縄銃」を実際見ながら使い方や重さなどを調べたそうです（写真提供：小国小学校）。



門馬小学校の三、四年生の皆さんは昔の道具のことを調べました。

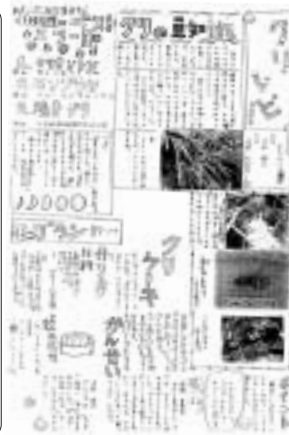


江繋小学校、小国小学校3、4年生の皆さんが合同で見学に訪れました。「鋤って重いよ！」

江繋小学校5・6年生の皆さんは、夏休みの自由研究で川井村の樹木について調べたことを「木の新聞」にまとめたそうです。研究では民俗資料館にも関連する資料を見学にきました。（写真、資料提供：江繋小学校）



⇒江繋小の皆さんが作製した「木の新聞」のひとつ。「ヒバ」「クリ」など五種を紹介。



◆年中行事の記録から

年中行事の記録から 昨年度、年中行事をテーマにした企画展を開催したことをきっかけに、引き続き村の年中行事の様子を記録しました。今後も続けていきますので、地域で行われている昔ながらの行事がありましたらご一報をお願いいたします。



端午 (旧5月5日)
神様にお供えする「まき」。ヨシの葉にコメ粉の団子を包み、ゆでたもの。片巢地区：中里久美江さん宅。



馬つこつなぎ (旧6月15日)
神様に供えるウマを模した人形。藁やムギから作る。



お盆の風景 (8月16日)
村内では郷土芸能がさかんに行われる。写真は川内地区流月院の境内で踊る川内念佛剣舞。



祭りの風景 (9月3日)
写真は小国地区早池峯新山神社祭礼で踊る湯澤鹿踊。



お大黒様の年取り (旧12月9日)
豆腐や大豆などを供え、槌でたたいてお祈りする。写真は「ふるさと体験教室」の様子。



火防祭の様子 (1月14日)
小国地区土沢集会所で行われた。神事後、末角神楽が奉納される。

民俗資料館へ寄贈・寄託された資料

(平成18年3月1日～19年2月28日まで)

ご協力ありがとうございました！寄贈・寄託された資料は、スペースの都合で展示はできませんが、もとの所有者のお名前を明記し、展示資料と同様にきちんと管理しています。今後は企画展などで紹介していきます。

石曾根 勝雄さん	「雑誌キング」、足踏み脱穀機など80点
太田 正吉さん	馬糞用具など21点
高屋 喜多男さん	地機など100点
田頭与右工門さん	江繋鹿踊関係資料 (寄託)
野崎 六之丞さん	糸取り用具3点
藤岡 豊さん	川内鹿踊関係資料
芳門 留次郎さん	古文書資料5点

◆民俗資料のガスくん蒸(11月7日～13日)

村生涯学習センター (旧小国中学校校舎) に隣接する民俗資料収納施設で全館ガスくん蒸を行いました。ここには3,000点余りの資料を保管しています。ほとんどの資料が木材や布などからできているため、保存には虫やカビの害に気をつけなくてはなりません。また、くん蒸を行った後も清掃などを行い、くん蒸を行った後も害虫がすみにくい環境を維持するよう努力してまいります。

民俗資料館のホームページは川井村のホームページから見るができます。

<http://www.vill.kawai.iwate.jp/>

→観光情報→北上山地民俗資料館

◆平成18年度の入館者数 (2月末現在)

一般	学生	児童	団体	免除・公用	合計
504	17	12	1,446	473	2,452

秋には岡山県からのツアー団体客を受け入れ、例年より入館者が増えました。

平成18年度企画展

川井村の郷土芸能

10.27~12.3

本展では川井村にどのような芸能があったのか、それらはどのように伝わってきたのか、何のために踊られたか、どのような衣装だったのかなど、それぞれの芸能について紹介することができました。

川井村の郷土芸能は、お盆の仏供養、寺社の縁日や落成式など、地域の様々な行事で踊られてきました。神事や仏供養のための踊りは、厳粛ながらも人々が楽しんで見る娯楽の一つでもありました。伝わった年代や由来はそれぞれ異なりますが、「舞い手も見物する人も踊りを支える人も地域の人」というように、地域の人々自身によって伝えられてきた芸能ばかりです。

現在村には郷土芸能保存会が18団体あり、28の芸能が傳承されています。一方『川井村郷土誌』には37の芸能が記録されています。しかし今回調べたところ、かつては13種類、58もの芸能が村内各地に存在したことを確認できました。修験道や神社に属する神樂が5つ、そのほかにこれほど多くの芸能が伝わってきた背景には、結婚や出稼ぎといった人々の暮らし方が大きく影響しているようです。そしてまた、同じようにして他の地域へ伝えられた芸能もあることから、当時の人々の地域を越えた活発な交流の様子が想像できます。

展示にあたって実施した聞き取り調査では、村の多くの皆さんにご協力いただきました。調査では、現在は保存会がなくても踊りや唄を覚えている人がいて、記録したいものもありました。またお話を聞くほどに確認できないことやわからないことがたくさんあり、もっとよく調べる必要があると感じました。本展をきっかけにさらに村の郷土芸能について調査や記録を進め、結果を紹介していければと考えております。

このたびの企画展の開催にあたり、ご協力をいただいた皆様、保存会の皆様に改めて御礼申し上げます。



企画展の様子



企画展の様子



川内鹿踊 (8/16)



箱石こうきり (8/15)



踊りには欠かせない太鼓や笛についても聞き取り調査をしました。

(協力：田頭と右エ門さん)

現在も傳承活動を行っている保存会には、お盆を中心に映像記録にも協力していただきました。61名の皆さん、12保存会、5寺社にご協力いただきました。

◆館務実習の受け入れ (9月19日~22日)

岩手大学人文社会科学部博物館学講座の学生27名が館務実習に訪れました。実習生は4日間の日程で資料整理や聞き取り調査といった学芸員の業務の一端を体験しました。資料整理の実習では、村生涯学習センター(旧小国中学校)に隣接する民俗資料収納施設(もとの体育館)の資料整理を行いました。この資料は村内3か所の倉庫に分散していた資料を平成17年度中に集めたもので、現在も整理作業をしているものです。また聞き取り調査では小国地区の榊原春雄さん、湯澤孝さん、湯澤ヨネさん、高屋喜多男さんからお話を伺い、70点ほどの資料について調査用紙にまとめました。

最終日には、雑穀畑の見学や郷土食作りを体験しました。食文化傳承ボランティアグループの皆さんや地元の皆さんに教えていただきながらの内容は、学生たちにとって地域文化を理解するよい機会となったようです。

4日間にわたり村内のたくさんの皆さんにご協力をいただきました。ありがとうございました。



[投網]についての聞き取り調査の様子



ソバ畑の見学

当館では平成15年度から4年間にわたり実測図講習会を開催しました。講師は当館名誉館長で岩手大学博物館学講師の名久井芳枝先生です。4年間でのべ18名が作図や聞き取り調査を経験しました。現在ではそのうち3名の方が引き続き実測図を作製しています。

実測図は民俗資料をきちんと計測して図面化したもので、民俗資料の素材、構造、製作技術、外形などの情報を伝達することができます。名久井先生は実測図には次の3つの役割があると述べておられます。

- 記録保存資料（未来への情報伝達）
- 啓蒙資料（一般の人々への情報伝達）
- 学術資料（研究者への情報伝達）

作図者がじっくりと観察し、丁寧に仕上げられた実測図は、当館の記録となるだけでなく、他の地域や未来へ向けた情報発信の手段となります。地道で労力を必要とする作業ですが、今後も川井村の伝統文化を記録する実測図作製を続けていければと考えています。

実測図講習会の成果を紹介します。

伝票番号	1425
資料名	箱自在鉤
旧所有者	芳門千次郎氏
材料	マダ（箱、支え板）、ナラ（さお）、鉄（鉤）
製作者	鉄部分は地元の鍛冶屋、箱部分は使い手が自分で簡単に鉤がけをして作ったと思われる。
製作方法	さお、鉤は古いものだが、箱と支え板は比較的新しいので、一度作りかえられたものではないか。
使用方法	桁の高い家で使用するもの。炉の上の桁につり下げて鉤に鍋をかけ、炉の火で暖める。竿の長さを調節するために箱がついている。竿の刻みは浅いが、支え板の角度により鉤に重い鍋などを下げても落ちることはない。
話者	高屋喜多男氏
重量	3810g
調査年月日	2005年2月28日
調査者	引屋敷千春
作図者	引屋敷千春

箱自在鉤ほこじさいかぎ として、箱をつけて作ったのでしょうか。これといった理由が見つかりませんが、使い込まれたらしく鉤かぎの先が丸みを帯びています。その先を念入りに計測し図にしましたが雰囲気あまり感じられず、自分の未熟さを感じました。それでも自分なりにこの鉤にはどんな鍋がかけられたのだろうか、欠配けはい時はやはり柄餅へらもちの入ったおかゆだったのだろうか、寒い冬にはびつしりと具の入った味噌汁がかけられていたのだろうか・・・などと思いを馳せました。計測の連続にうんざりしそうになりますが、使い込まれたてすりへった木には温かみを感じさせる何かがあるような気になり、最後までやりとおせた気がします。

引屋敷千春

